本体八六〇〇円〕

岩下哲典著『権力者と江戸のくすり』

医薬行政の根幹に関わるような問題や矛盾が相次いで大きな社会問題となっている今日の事態を考えるとき、そもそもわが国の医薬行政の出発点はいかなるものであったか改めて問いたくなる。

本書は、現代の医薬行政の深刻な問題を、遠く江戸時代にまでさかのぼって考察しようという問題意識を持って、近年の論考を三話にまとめた意欲作である。表題は、内容に比して、やや生硬な感を与えなくもないが、「権力者」とは将軍のほか、ここでは主に尾張藩主を指している。

第一話は、「江戸時代の人参栽培と薬師信仰」として、江戸中期に尾張藩薬園から日光東照宮に人参が献上された謎の解明をテーマとする。吉宗の人参栽培政策による国産人参の安定供給は、庶民の考え方を「吉宗の御深仁」に収斂する効果があったと評価する。日光で栽培された御種人参は尾張藩にも下付される。これは御下屋敷御薬園で栽培され、三村森軒らの努力によって、人参製法が完成する。この尾張御薬園製の人参が吉宗の上覧するところとなり、幕府を通じて日光山にも献上されたのである。この献上の理由と意義を、家康・天海の構築した薬師如来信仰にもとづく支配イデオロギーを補完するための儀式と説き、江戸時代においては、権力と薬と薬園と、そして宗教が非常に離れがたく結び付いていたことを指摘する。

第二話は、「将軍から下賜された国産葡萄酒」として、尾張藩『事蹟録』の正保元（一六四四）年の条にある「日本制之葡萄酒」の記事を取り上げ、国産葡萄酒に関する最古の新出史料として考証し、国産葡萄酒が尾張藩主徳川義直に下賜された意味を問う。甲斐勝沼大善寺の葡萄薬師如来の存在とつなげて、薬酒としての葡萄酒の薬師如来と薬酒と薬園の密接な関係を指摘する。

第三話は、「殿様から下賜された御側の御薬」として、全部で一〇七冊あるという尾張藩『御小納戸日記』の医薬記事に関する、はじめてのまとまった分析・紹介がおこなわれている。尾張藩では、江戸後期になると、藩御薬園で栽培された薬用人参をはじめ中風の薬・烏犀円や狂犬病薬などが藩主の御側に常備されており、藩主よりの御薬として藩士にあたえられ、領民にも疫病の御薬が下賜されることが慣行化していたことが豊富な事例で示される。薬を媒介にした領主と藩士・領民の支配関係を如実に解明している。また、御深井御薬園を管理した御薬園預細井氏の経歴、人となり、家計やその運命などについても考察し、藩御薬園が藩主のきわめてプライベートな空間だったことを指摘している。

本書は、愛知県が大府市内に建設を予定している「愛知県薬草園」の復元展示施設「尾張藩御深井御庭御薬園」に関する調査のために結成された尾張本草学研究会における著者の

調査・研究がもとになっている。評者も同研究会において著者と同席した一人である。著者が、限られた条件の中で、精力的に史料を発掘して会をリードされたことが印象的であった。同研究会の成果をも含めて、尾張本草学に関する新発見のいくつかが、著者のデビュー作として刊行されたことは誠に喜ばしい。

また本書は、江戸の歴史のテキストとしても意図されたものか、余話が四題「現代生活の中の江戸、手紙と住まい」「江戸の通信手段『注進手札』」「尾張藩江戸屋敷のアトラクション『町屋』」などが収められていて、江戸の時代相がわかりやすく理解できるよう配慮されている。

（遠藤　正治）

〔北樹出版：〒153-0061東京都目黒区中目黒一―二―六、電話〇三―三七一五―一五二五、平成十年四月、四六判一九七頁、本体二〇〇〇円〕

琉球大学医学部附属地域医療研究センター編

『沖縄の歴史と医療史』

「沖縄の歴史と医療史」という表題に興味をそそられた。先に出版された「沖縄の疾病とその特性」につぐ、第二集ということであるが、発刊の辞に、「永い歴史の中で地域や個人の生活環境は相互に作用し合い疾病の発現や病態へ影響し、さらに遺伝子発現等にも影響したと考え、今回は歴史的な部分に焦点をあてました。」とあるように、地域の疾病と医療史を、あえて「沖縄の歴史と医療史」としたところに、沖縄の地域性、特殊性を感じたからである。

沖縄は日本の最南端に位置する亜熱帯地域で、他地域とは異なった気候・風土である。また、歴史を遡ると内地の諸国とはその成立経緯も異なり、首里城に象徴されるように、琉球王国として独自の文化の花を咲かせた。近世以後は薩摩（幕府）の進攻と支配を受け、維新後は明治政府による強制的な「沖縄県」への移行があり、太平洋戦争では沖縄本島が戦場と化して殺戮に遭い、敗戦後は米国海軍軍政府の監督下にあって自治権を失った。日本に復帰した現在も未だに基地問題を抱えているなど、政治的にも希有な体験を持つ島国ということが言える。したがって、これらの沖縄独特の環境と歴史を無視して医療とその歴史を語ることはできない。本書はそのことを踏まえて、I部「沖縄（琉球）医史概略」、II部「歴史の中の医療史」、III部「沖縄医療史の展開」の三部で構成されており、沖縄という地域の歴史的背景を把握しながら沖縄の医療の過去・現在を理解できるように編集されている。

年表の類は、一般的に参考事項として巻末に付けられることが多いが、本書ではまずI部で沖縄の医史関係記事（年表）に目を通すことによって沖縄医史の概略を知ることができるように工夫されており、後続の医療史の理解を助けている。II部では、沖縄の先史時代から今日までの沖縄史の概説と医療史が語られているが、「黎明期の医療制度」と「民間療法（まじない的療法）」に関する記事、保健医療の視点から論じられて